

国立山梨大学教授  
光村図書書写教科書 代表編集者・著作者  
全国大学書写書道教育学会理事長

## 宮澤正明氏

# 『漢字のつくりは奥深く、 面白いですよ』



まだ汗ばむ陽気の2015年9月27日の昼下がり、神奈川県横浜市港北区の大倉山記念館にて、「ふでともかきかた教室」の講師研修会が開催。研修会での講演に先立ち、講師の宮澤教授にお話しを伺いました。

## 書との出会い

静岡県三島市で出生し、三島市と沼津市の間に位置する駿東郡長泉町で育った宮澤教授。「毎日富士山を見ながら育ちました。富士山は大きいので、日本中どこからでも見ることができる山だと思っていましたね。見る山・眺める山だと思っていたので、登ったことはないんですよ。自宅の周りは田畑が多く、自然の中でのびのびと育ちました」とのこと。挨拶を交わした時に大らかな印象を受けたのは、こんな環境で幼少期を過ごされていたからなのかもしれません。書との出会いについてお聞きすると「父は小学校の教師だったのですが、私の物心がついたぐらいに独立し、自宅で書道塾を開き、更に表札や墓石の文字を書く筆耕の仕事を始めました。自宅の一部が父の書道塾だったので、書は生活の一部だったんですね。当たり前で存在でしたし、自分も幼稚園に入ってから父の書道塾で学んでいました」「生活の一部だったから始めただけで、書というものに興味があったとか、字を書くことが楽しかったとかそういった記憶はあまりないです」と当時を振り返ってくださいました。

## 書の道に進むことになったきっかけは？

書道は続けていたものの、バドミントン部に所属し青春時代を満喫していたという宮澤教授。本格的に興味を持ち、取り組み始めたのは高校生になってからとのこと。「書道の授業中に、授業態度が悪くて廊下に出されてしまったことがあって。やっと教室に戻れたと安心していたら、今度はかなり難易度の高い古典の見本を渡されて、課題としてやってくるように言われたんですよ。最初は、やらないとまずいになって気持ちで始めたんですが、書いていくうちに漢字のつくりに興味が出てきて、すっかり漢字のとりこになってしまいました。漢字って面白いんですよ」。このエピソードがきっかけで、漢字について色々と調べて行く中、学校の図書館で見つけたのが加藤常賢著の『漢字の起源』だったそうです。「ちょうど進路指導の時期で、担任の先生にこの本の話をしたところ、『宮澤くんの進路は決まったよ』と言われてまして。何を隠そう、漢字の起源を図書館に入れたのが担任の先生で、著者である加藤常賢先生は二松學舎大学の学長でいらっしゃるから、宮澤くんは二松學舎大学へ進学しなさいということだったんですね。担任の先生の頭の中でつながったんだと思うんです」。

迷わず二松學舎大学文学部中国文学科へ進学した宮澤教授。大学院へも進み、漢字のメカニズムについて研究を重ねられたそうです。「最初は象形文字が考えだされて、そこからどの部分が必要か不要かということを検討してシンプルな文字になっていくわけです。その経緯を知って『なるほど』って感心することも多いですし、象形文字は実際に書いてみると古代人がどうしてこの文字を作り上げたのかが分かることもあるんです。奥深いし、常に新たな発見があります」と熱く語ってくださいました。



殷の時代(約3,300年前)の文字である甲骨文字を使って、漢字のつくりについて説明してくださる宮澤教授

## 書写教育との出会いとこれから

卒業後は都留文科大学で教壇に立ちながら、引き続き文字や漢字の研究を続けていくはずだったとのこと。「学生から、学校教育における書写の指導をして欲しいと相談を受けたんです。自分も知識が深くなかったもので、色々と調べたのですが、そこで書写の研究が少ないことを知りました。であればやってみようということになり、論文を発表したらいつしか『書写書道教育の専門家』って呼ばれるようになったわけです。ここで、書写教育についてもっとやっていたかなきゃいけないんだなと感じました」。



戦前、学校教育においては「習字」という授業が組まれていました。これは、繰り返し書くことで文字や漢字を修得する方法で、お手本を見ながらお手本通りに字を何度も書くことで身に付けていくという考え方です。昭和33年以降は「書写」という考え方のもと学校現場での指導がなされています。

「書写とは何度も字を書いて覚えるという方法ではありません。原理・原則を学んで理解し、様々な文字や漢字の書き方に転用していけるようになるのが目的です」。そのため、お手本を見ながらではなく、聴いて書く(聴学)、活字をみながら書く(視学)などのプログラムも有効とのこと。「簡単にいえば、どうしてここを止めて、ここをはらうのかということが分かっていればお手本は要らないということです。ただし、教師の中ではまだ書写の認識が低い。戦前と同じスタイルで授業を進めているケースも多く見られます」。

これからのことを伺うと、「先ほどもお話ししましたが、残念ながら日本の教育現場では書写という考え方が十分定着しているとは言えません。書写の考え方が日本の文字教育現場に早く浸透するように、そして子ども達ももっと文字に興味を持って接することができるように、研究や活動を続けていきたいと思っております」と語ってくださいました。



1952年静岡県三島市生まれ。大学で研究や指導をする傍ら、第45回毎日書道展(秀作賞)(1993年)、第37回毎日書道展(毎日賞)(1985年)、第36回毎日書道展(毎日賞)(1984年)などの受賞歴もある

### お話しを伺って

書写書道教育の世界では著名な宮澤教授。質問に対し、わかりやく丁寧にお話ししてくださいました。「書が生活の一部だった」「漢字のメカニズムについて研究を続けようとしたが、学生の相談から書写の研究の重要性を感じた」と、目の前のことを自然に受け入れ、それを自分の使命として継続していく。宮澤教授のお話しにすんなりと引きこまれていったのは、教授のこういったお人柄のせいなのだと感じました。書写の考え方を知ることでもっと文字や漢字に興味を持てることを実感。学校教育の場でも、文字や漢字の魅力を伝え、子ども達が楽しんで学ぶことができるような指導が早く定着することを望んでやみません。

取材・文 アドヤン／橋本 岳子

撮影／joymie